

モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治 ～ロシアと中国の視点から～

第14期社会工学研究会
アジアダイナミズム班

学部生 : 野中, 高, 中西, 村上, 日高
大学院生 : 杉, 須貝, 小柳, 高橋, 二本柳, 佐々木, 斎藤
指導教員 : 金美徳, 水盛涼一

Agenda

1. 振り返り（2017年～2022年 論文のテーマ）
2. 背景
 - 地理的背景
 - 2023年度「アジアダイナミズム班」のテーマ
3. モンゴルの宗教と組織
4. 中国の視点より
 - 元が衰退した経緯と存亡への宗教の影響
 - 変化した白蓮教
5. ロシアの視点より
 - 「タタールのくびき」論争とその実態
 - ロシアとモンゴルの関係に影響を与えた宗教の役割
 - 歴史における宗教と政治
6. フィールドワーク
 - モンゴル帝国とロシアの関係（宮野 裕 教授）
 - 台湾の宗教と政権の関係（菊池 秀明 教授）
7. アジアダイナミズム班 活動記録
8. 参考文献・論文

振り返り（2017年～2022年 論文のテーマ）

| 年度 | タイトル | 頁数 |
|------|---------------------------|-----|
| 2017 | モンゴル帝国のユーラシア興隆史 | 107 |
| 2018 | モンゴル帝国の興隆と衰退 | 244 |
| 2019 | モンゴル帝国と朝鮮半島 | 84 |
| 2020 | パンデミックのユーラシア史とポストコロナ | 118 |
| 2021 | 倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～ | 106 |
| 2022 | 華人華僑とモンゴル帝国史 | 81 |

659

2021年度・2022年度は、モンゴル帝国の影響を受けて周辺地域で発生した社会現象としての倭寇や華人華僑を研究した。

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました(2023/3/30発売 全240頁)



背景

地理：モンゴル帝国のアジア統一（13世紀）

13世紀

1250年 モンゴルによるルーシ支配が徐々に確立(徴税・徴兵)



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia2>

地理：モンゴル帝国が衰退・明の時代（14-15世紀）

14-15世紀 1240年~1480年(240年間)
タタールのくびき(モンゴルのロシア地域支配)

1351年 紅巾の乱
1368年 明 建国



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

■■■ モンゴル帝国のアジア統一時の領域

2023年度「アジアダイナミズム班」のテーマ

モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治 ～中国とロシアの視点から～



中国



ロシア

年表：モンゴル帝国・中国・ロシア・日本

| 世紀 | モンゴル帝国・中国 | 中国宗教の動き | ロシア地域とモンゴル支配 | 日本 |
|---------|--|--|--|--|
| 8-13世紀 | 705年 武則天失脚 唐の復活 755年 安史の乱 1206年 モンゴル帝国の誕生 1271年 元 建国 | 694年 マニ教が中国に伝来 南宋末頃、マニ教と弥勒信仰が習合した 白蓮教 が生まれる 元時代は布教の公認を受けるも→何度も禁止令 | 1223 チンギス・ハーンの武将ジェベらがルーシ攻撃開始 1227 チンギス・ハーン没、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)をジョチの長子のバトゥが引き継ぐ(ジョチはチンギス・ハーンの長子) 1236-42 バトゥの率いる軍がヨーロッパ侵攻(第一次、第二次) 1243 ボルガ河畔のサライをジョチ・ウルスの都と定める 1250年代 モンゴル(タタール)によるルーシ支配 (徴税・徴兵)が徐々に確立 1266 ジョチ・ウルスがモンゴルから分離 | 894年 遣唐使廃止 1274年 文永の役 1281年 弘安の役 |
| 14-16世紀 | 1305年 元が5つに分裂 1368年 明 建国 1383年 明で海禁政策開始 1567年 明が海禁を緩和 | 1338年、白蓮教の反乱が起こるも鎮圧 1351年、 紅巾の乱 ：北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で反乱を起こす(東系紅巾軍) 呼応した安徽の紅巾軍配下に 朱元璋 がいた 1351年、湖北で徐寿輝が皇帝を名乗る(西系紅巾軍) 1368年 朱元璋が元を倒し皇帝「 洪武帝 」になる。これとともに白蓮教を禁止 | 1480 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了 モンゴル(タタール)のロシア地域支配が終了(240年間) | 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令 |
| 17-18世紀 | 1616年清 建国 1644年 明が滅亡 , 満州族である 清 の時代へ | 清政府は取り締まるべき宗教を内容にかかわらず「白蓮教」とまとめて呼称し弾圧 1796年 嘉慶白蓮教徒の乱 | 1700 クリミア・ハン国への貢納が終了 | 1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令 |
| 19世紀 | | | | 1858年 米修好通商条約 1868年 五榜の掲示 |
| 20世紀 | 1911年 辛亥革命 1912年 清が滅亡、中華民国誕生 | | | 1910年 韓国併合 1972年 日中国交正常化 |



モンゴルの宗教と組織

問題意識

元が西の東方正教会を容認したとき、元の信仰がどのようなものであったのか。
シャーマニズム信仰が東方正教会とどのように違い、どのような信仰形態であったのか

1. チンギスハンとシャーマニズム

チンギスハンの一族はシャーマニズム信仰をしていた。

東アジアで大国を形成したとき、様々な地域の思想が反映され仏教思想をも取り込んで独自の世界観を作っていく。

特に宇宙三界観という概念が特徴的

2. シャーマニズムとモンゴル

シャーマニズム信仰は北東アジアと中南米にみられる。

その中で北東アジアのシャーマニズムはシベリアのツングース人が発祥

当時は民主主義ではない、一族の考えが国の考えに国の権力者に広がった。



出典 : https://blog.goo.ne.jp/siroi_1956/e/ef84a4d712e0733bcd9bffb732fae3ca9

Encarta Encyclopedia, Corbis/Bettmann

結論

- ・東洋の考えと西洋の考えの違い
- ・民衆と国の違い

問題意識

モンゴル帝国が広大な空間において、長期間に渡り繁栄した要因として独自の組織構造が影響しているのか？ 同時期に繁栄したオスマン帝国と比較する。

1. モンゴル帝国の組織構造（約400年間存続）

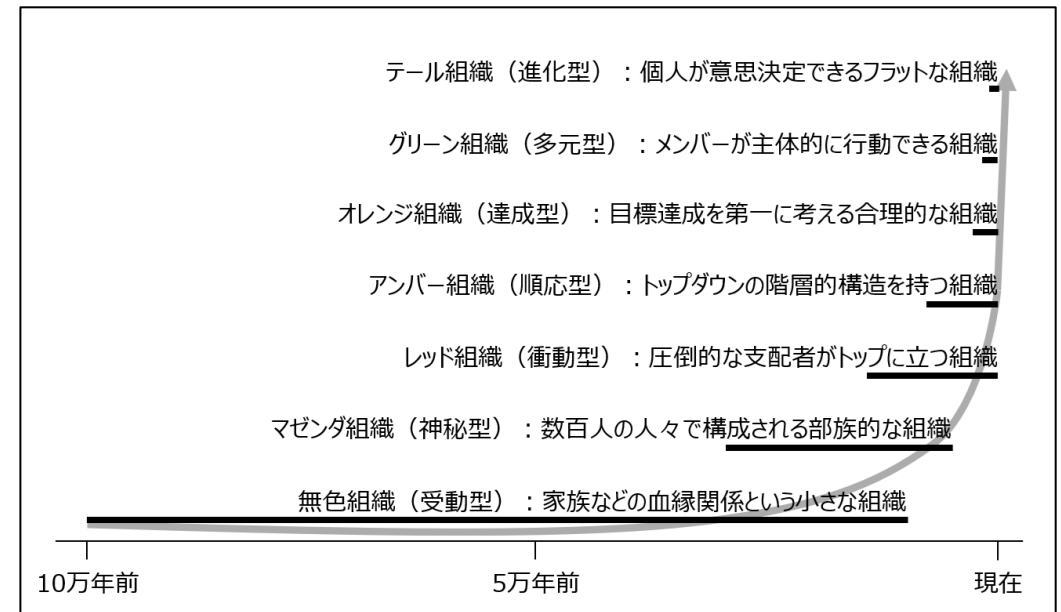
モンゴル帝国は、1206年にチンギス・カンが即位し発足した。その組織構造は、牧民たちを95個の千戸群に再編成し、千戸の下にも、百戸や十戸と言う具合に組織化された多民族混合ハイブリット集団であり、**戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようであった。**これはティール組織（進化型）の必要要素を満たしている可能性がある。

2. オスマン帝国の組織構造（約600年間存続）

オスマン帝国は、1299年頃、イスラム世界の辺境であるアナトリア北西部に誕生した。オスマン王家を中心とした中央集権体制を作り上げ、イスラム法を用いて帝国を統制していた。

3. 組織の発達段階モデル

※ フレデリック・ララー『ティール組織』を元に作成



結論

- 今回の研究では、両国間の組織構造の違いを明確には出来なかった。
- しかし、モンゴル帝国をティール組織（進化型）の要素である3つの突破口、①自主経営、②全体性、③進化する目的、に照らすと、何れの項目も満たしている可能性があり、ララーが提唱した組織の発達段階モデルは、無色組織（受動型）から順に発達するだけではないとの仮説に行き着いた。



ロシア
(ルーシ)

モスクワ

キエフ

Oirats (オイラト)

Mongol (タタール(鞑靼))

中国の視点より



中国

太祖高皇帝

中国の視点より
元が衰退した経緯と存亡への宗教の影響



モンゴル帝国の存亡に宗教はどう影響したか

中国

問題意識

地域に定住しない性質をもつ「遊牧民族」・モンゴル人が大陸の西側に版図を広げ、“世界最強”といわれる国を作り上げた政権・組織運営の特徴を探るとともに、元朝の滅亡につながった白蓮教（秘密結社）が王朝末期、住民に浸透していく過程を明らかにすることで、現代中国、国際社会、日本社会が学び得るものを探る。

1. モンゴル帝国、組織の特徴 = 「統制」と「寛容」

▽モンゴル遊牧民はきわめて純朴にして勇敢、命令・規律によく従った。精強な軍隊組織、徹底したピラミッド式のシステム構築、『戦わない軍隊』とも言われ、自軍に対しては周到な計画性と徹底した準備、意志統一、敵方については、徹底した調査と調略工作を行った。また十進法単位の組織体制で軍・人民の団結と規律を高めた。

▽モンゴル人の命を徹底して大切にした。命を軽視すれば組織は瓦解することを痛切に感じ、国の柱とした。宗教にも比較的寛容で、あらゆる民族・文化・宗教を受け入れた。このことが、組織の統制が効いている時には国力を豊かにするために機能するが、国勢が衰え、ガバナンスが効かない状況下においては、白蓮教の浸透など倒幕を許す要因になることが推測された。

2. 宗教・秘密結社はいかに組織に浸透するのか

▽『中国が激動するとき、必ず秘密結社は現れる』。「劫」の闇から人々を救済するために、弥勒仏が人間として地上に転生する。「劫」からの救済という世界観が、政治腐敗や水南など末期的症状を呈していた十四世紀の元朝に浸透したことは想像に難くない。

3. 白蓮教と紅巾の乱

▽現存する世界への呪詛から破局を予感し、その闇から満たされた理想世界への救済を確信する、白蓮教の世界観の重要なカギはマニ教にある。

結論

元朝末期、天災と失政により貧しさにあえいでいた住民が至福を希求するにあたり、秘密結社が浸透し、光明・救済を求めらるうねりとなり、王朝を滅ぼす原動力となった。「秘密結社」は明、清以降に続くその後の中国社会にも存在し、再度反乱を起こすなど国の行く末に影響を与えているが、すべて調べ切れていない。その成り立ちと社会的機能、明、清以降に続く影響をさらに調べ、現代社会にどうつながっているのか、組織運営上何を学び取るべきなのかを引き続き考えていきたい。

問題意識

元の経済政策は庶民の生活を困窮させ、紅巾の乱の起因になった。財政難の要因とされる「交鈔の乱発、専売制度、チベット仏教の保護」は、庶民の生活にどのように影響したのか？

1. 交鈔(紙幣)の乱発

元は、紙切れの交鈔に通貨価値があるということを時に暴力を持って庶民へ浸透させた。チベットに至っては上層部から庶民に至るまで中央政府の公布施行する通貨制度を守らせた。紙幣は両税や折帛銭等の納入に使用されており、農民層にも流通範囲を拡大させていた。財政難政策として交鈔発行を促進したことにより貨幣価値は下落、インフレーションを起こした。民衆は交鈔を紙くず同様に扱うようになり従来の物々交換に戻ってしまった。

2. 専売制度

塩引(販売許可証)が、中統鈔(紙幣)で購入されたていた記録が残っている。元の国家財政は塩税に依存度が高く、専売制度による税率の引き上げは庶民の生活にも

影響した。中央政府が継承争いで揉めている最中、紅巾の乱に先んじて、南部で塩商人が反乱を起こした。

3. チベット仏教の保護・祭祀に費用を投じた

チベットと元との交渉内容は、サキャ派との宗教的交流とそれに伴う政治的・社会的権益の授受に集約することにあつた。北方諸王への賜与は、中国王朝となった元への彼らの反発を和らげる意図もあり、懐柔策としても必要不可欠なものであつた。神御殿の祭祀は太廟の祭祀と並んで先祖の恩に報いる大事であるとし、紅巾の乱の最中でも回数を増やした。各国共通価値を持つ銀を定例の賜与の他、種々の名目で臨時に与えることも多く、その額は元の歳入銀を上回ることも稀ではなかつた。結果、財政難を乗り切るため、経済政策に至つた。

結論

• 元は農民層に至るまでの庶民に徹底した通貨制度を浸透させていた。それゆえ財政難の際には経済政策による通貨価値の下落、インフレーションが庶民の生活に直接影響を及ぼし、紅巾の乱につながってしまった。

• 民衆暴動の史的研究によれば、暴動は単なる食料不足への不満で起こるのではなく、取引や流通における慣行的・伝統的な経済行為規範が犯されたことによる義の自認行為とのこと。経済政策の民衆への影響の顛末は、これに当てはまるとも言える。

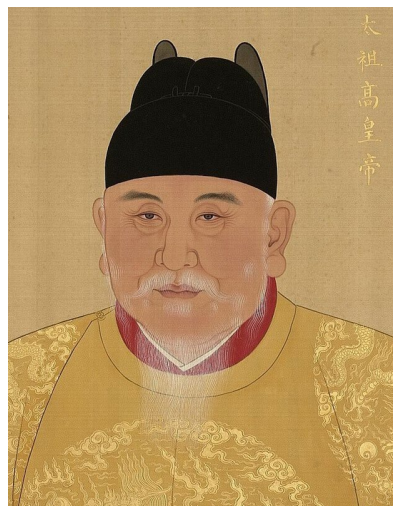
明の初代皇帝・洪武帝と白蓮教との関係

中国

問題意識

洪武帝は、白蓮教徒として元を打倒し明を建国したが、即位後は白蓮教の弾圧を行った。弾圧の背景には、白蓮教と他の権力者とのつながりを牽制し、白蓮教を通じた武器や情報、財の吸い上げ等の裏取引をする目的は無かったのか？

- 洪武帝は、紅巾党に参加していたことを恥じ、その事実をできる限り隠そうとした。
- 紅巾党出身の家来もいたが、そのほとんどが殺され、浙江府学教授の林元亮が、海門衛兵士のために増俸を感謝する表（天使に奉る文書）を作った際に「則を作りて憲を垂れる」と則の文字を使用したことから、洪武帝を「紅巾の賊」と誹ったものとして処刑された。
- 儒教に基づく伝統的な中国王朝の復活を目指したので、他の宗教との蜜月は考え難い。



- 錦衣衛という諜報組織を創設し、家臣たちを監視していたと言われているが、諜報活動に自組織を使用するならば、わざわざ白蓮教という秘密結社を飼い馴らしておく必要はない。
- 白蓮教弾圧の動きを知るにあたり、官憲による摘発とその動員となり得る反官憲行動を確認したが、いずれも元末の西系紅巾の流れに繋がっていた。これは支配理念の徹底が旧西系紅巾の地盤に対して強力に行われたことをうかがわせ「妖」「邪」根絶の理念が遵守されていたことを表わす。
- 東系紅巾を摘発がほとんど確認できず、洪武帝の古巣利用の可能性も残されたが、東系紅巾党（徐州集団、濠州集団）の持つ性格をみるに蜂起時に於いては明確な政治理念や宗教的な理念は所有していなかった。



結論

- 洪武帝は、白蓮教を表で弾圧していたが、裏取引をしていた可能性は低い。
- 建国前に洪武帝が所属した東系紅巾党は明確な宗教的思想を所有していないため、明の統治に反抗する脅威として見做されなかった可能性がある。その背景には、洪武帝が紅巾党すなわち白蓮教の内情・特性を熟知していたことがあるとも言える。



中国の視点より
変化した白蓮教

問題意識

1368年モンゴル帝国を倒した『白蓮教(秘密結社)』は果たして正教なのか？それとも邪教なのか？

1. 白蓮教の歴史

白蓮教は1131年の創立当初は**阿弥陀(あみだ)信仰**であったが元末ころから**弥勒(みろく)信仰**を中核とする教団へと**変化した**。

2. 白蓮教の宗教思想の布教

茅子元は天台宗の教法をまねて、円融四土の図、晨朝の礼懺文、偈歌四句、仏念五声をつくった。

3. 白蓮教が結束を強固にした理由

- ・ 経済的な不平等や社会的な不安(不作や飢饉)
- ・ 対外的な圧力(身分的な階層や重なる弾圧)
- ・ カルト的な呪術

【カルト的な呪術で結束】1351年紅巾の乱の発端

民衆を奮起させ多くの者を信じ込ませるための呪術をもちいていた。韓山童は蜂起前年から石人工作をし、童謡や弥勒佛下生信仰を流布させ、更に北宋滅亡時の徽宗や劉光世の子孫(矯)と詐称した。

★**片目石**を事前に川の砂浜に埋め「**片目石が現れたら呪われる**」と**自作自演**をして、結束力を高めた



結論

創立時には清らかな信仰をする正教であったが、社会的・時代的变化によって才カルト的で攻撃的な邪教に変化していった

白蓮教は、元の民衆にとって真の革命家だったのか

中国

問題意識

漢民族にとって外敵であるモンゴル族に支配されていた元において、白蓮教の起こした反乱は後の中国を形成するうえで思想にどのような影響を与えたのか。

1. 白蓮教の思想

浄土思想を重視し、仏教・道教・儒教や民間の信仰を取り入れた複合的な宗教であった。

圧政に対し、平等を訴えた白蓮教は弾圧されることも多々あったが、民衆の目にはヒーローに見えていた。そのため、多くの信者がいた。

2. 国内に矢を立てた理由

元の時代は、ヨーロッパの一部地域を占領するまで広がっており、現状を変えるためには国を変える必要があった。そのため、白蓮教は民衆の不安を煽り、元と対立することになる。

3. 革命家たる理由

白蓮教は元を大きく衰退させた後、白蓮教徒であったが、明の皇帝となった洪武帝により激しい弾圧を受けた。

宗教としての力は衰えたが、後の天理教・太平天国などの秘密結社や宗教の思想に大きな影響力を与えることになる。

見方により悪か正義か分かれる白蓮教は、思惑があれど民衆を導き国を変えた事実は変わらない。

結論

- 現代の中国は宗教を5つに制限し、その他を統制しているが、歴史の中で中国がどこよりも宗教の持つ影響力を体験してきたからである。白蓮教の反乱は、人口の多い農民・貧困層に行動を起こせば現状を変えられるという思想を植え付け、後の秘密結社や宗教を煽ることになった。これが現代の宗教規制につながっている。
- 元の民衆にとって、白蓮教は革命家だった。一方、元の支配国の中には今の体制が崩れ、内乱が始まるきっかけになった白蓮教への批判もあった

問題意識

白蓮教が起こした紅巾の乱とそれ以降の混乱に関する考察から、現代の中国での宗教統制にどう影響を与えたのか、与えなかったのかを探る

1. 白蓮教の反乱とそれ以降の動き

1351年に白蓮教徒によって紅巾の乱が起きた。この反乱は鎮圧ができず、結果として元を倒した。明に代わった後に白蓮教は禁止という宗教の根幹に関わる統制を受けたのである。

明に続いた清でも厳しく取り締まりが行われたが、1796年に白蓮教徒の乱を起こしたのである。この乱は、1804年まで続いたが結果鎮圧されてしまったが、清の力が弱くなったを示したのである。

2. 現代中国の宗教統制

2009年に漢族とウイグル族が起こした「ウルムチ騒乱」以降、中国政府はテロ対策を理由に、ウイグル族への監視を強化したのだ。ウイグル族は半数がイスラム教である。この反乱以降の統制として、民家に一軒一軒QRコードをつけたりモスク取り壊しや閉鎖やヒジャブの禁止などが挙げられるのだ。

2015年に宗教の中国化を打ち出し、習近平氏は、我が国の宗教の中国化の方向を堅持し、宗教が社会主義社会に適応するように積極的に導く」と発言したのである。

結論

中国において白蓮教が起こした反乱は全国規模で起きており、止めることができず結果政権を代えるにまで至ったのである。その力を危惧した政権側は様々な統制を行っていたが、それでも宗教結社として残り続けたのである。それだけ白蓮教の存在が大衆に根付いたのであると考えられるのである。このため現代政府の過剰なまでの統制に繋がったと考えられるのである。

秘密結社はどう政治的影響力を及ぼしたのか

中国

問題意識

秘密結社である洪門(ホンメン)は清朝の支配に抵抗する過程で、中国の民衆の民族意識や愛国心を高め、中国の近代化を促進する役割を果たした。秘密結社である洪門がどのように政治的影響力をひろめていったのか？

・ 洪門の起源は諸説あるが、清朝が成立した後、明朝の遺臣や民衆が結成した互助組織が起源とされている。これらの組織は、清朝の支配に抵抗するために武装し、各地で反清闘争を展開した。

・ 洪門は18世紀後半以降、華僑の間で急速に拡大した。華僑の間で社会保障や教育などのサービスを提供することで、華僑社会の結束を強める役割も果たした。

・ 洪門は、中国の近代史において重要な役割を果たしたとされている。1911年に起きた辛亥革命では、洪門は孫文率いる中国同盟会と協力し、清朝の打倒に貢献した。

・ 洪門は、中国の近現代史において重要な役割を果たした秘密結社である。現代においても、世界各地で活動をしている洪門は、中華系社会の結束を図り、社会福祉や文化交流、ビジネスネットワーク、政治活動などを通じて、多様な役割を果たしている。



國際洪門中華總會



洪門天地会

出典：<https://hungmen-hq.org/>

出典：<https://www.facebook.com/acfreemasons3821.org.jp/>

結論

洪門は、中国の近現代史において重要な役割を果たした秘密結社である。現代においても世界各地で活動をしている洪門は、中華系社会の結束を図り、社会福祉や文化交流、ビジネスネットワーク、政治活動などを通じて、多様な役割を果たしている。

ロシア
(ルーシ)

キエフ


モスクワ

ロシアの視点より

Oirats (オイラト)

Mongol (タタール(鞑靼))

中国

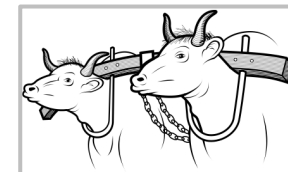
An illustration of two oxen pulling a wooden yoke. The oxen are depicted in a simple, line-art style with some shading on their faces and horns. The yoke is made of wood and has a central bar with two vertical posts. The oxen are facing left, and the yoke is positioned across their backs.

ロシアの視点より
タタールのくびき・ロシア正教

「タタールのくびき」論争とその実態

問題意識

モンゴル帝国の圧政を示す「タタールのくびき」にはモンゴルが与えたロシアへの影響に対する様々な見解が語られているが、果たしてその実態はどのようなものだったのか？現代のロシアに与えた影響はあったのか？



モンゴル帝国とロシアを巡る論争

- 1) 19世紀ヨーロッパ人
 - 「ヨーロッパ人とは認めない」「一皮むけばモンゴルだ。」
- 2) 20世紀のソ連の歴史家
 - 「我が国には一切モンゴルの影響など無かった！」
- 3) ユーラシア派の歴史家
 - 「ロシアはモンゴルの影響で始まった。モンゴルのおかげだ。」
 - 「共に戦い、交流し、モンゴル人の妻も迎え入れていた」
 - 「ロシアの知識人には沈黙のイデオロギーがあった」
- 4) 現在（栗生沢先生など）
 - 「どちらも言いすぎ。資料上の証拠は圧倒的に不足。」
 - 「淡々と当時の歴史事象の回復につとめるべきだ。」

- 1250-1480年(240年間)のモンゴル(タタール)の支配の中で、当時のルーシ地域の民は「くびき」という憎悪の認識は無かった
- **13世紀**当時の知識人「**ロシア正教会聖職者**」により**自己中心的に残された被害者側史料**から**19世紀**の人々が受容し「モンゴル=悪」という被害者意識の中で「タタールのくびき」という**黒歴史**として語り継がれてしまった結果である
- **モンゴル側の主張**(文書)は中国・イラク方面については残っていたが、**ロシア方面についての文書はほとんど残っていない**ため、ロシア側の一方的な言い分のみが残っている
- 16世紀初頭、ジョチ・ウルス崩壊後、**ロシア**のイヴァン雷帝はカザン・カン国他などを征服。その後のシベリア統制において、**タタールの慣行を一部利用**したため、ロシアが**モンゴルを「相続」**したとする見方もあったが**一つの側面に過ぎない**

結論

- 「タタールのくびき(モンゴル帝国による圧政)」は「ロシア正教会聖職者」の被害者意識により後から作られた誇張されたイメージだった
- モンゴル帝国の時代はロシアの歴史の一部であり、現代のロシアに対する直接的な影響は薄い
- しかし、歴史的な経験や文化的な相互作用が、ロシアのアイデンティティや文化に影響を与えている可能性はある

問題意識

ロシア地域がモンゴルの支配下に入る過程、また独立する過程で、宗教はどのような役割を果たしたのか？
近代以前における宗教と統治の関係の一つの例として、現代に生きる我々の参考にする

ロシアがモンゴル支配下に入った経緯

- 13世紀前半のロシアは、モンゴルだけでなく、スウェーデン、チュートン騎士団からも攻撃されていた（カトリックは改宗を要求）
- モンゴル(ジョチ・ウルス)の統治方法は間接支配で、宗教に寛容で貢納を免除していたことから、1240年、ノヴゴロド大公アレクサンドルはモンゴルと和議を結び、ヨーロッパの2勢力を退けた
- モンゴルの朝貢による支配に入ることは「正教会が歓迎」(宮野、2023)。アレクサンドルは、正教を守護した英雄として列聖され、「ロシア愛国主義の源流」となった(廣岡、2020)

ロシアがモンゴルから独立する経緯

- 14世紀初頭：ジョチ・ウルスはイスラム教に改宗
→ロシア正教会への態度が敵対的に変化
- 1380年、モスクワ大公ディミトリーは、他のロシア諸公と同盟を結んだうえで、ロシア正教ラドネジ修道院長の聖セルギーを訪れ意見を問うた。セルギーは「タタールと戦うべし」と進言、クリコヴォの戦いでロシア側が勝利
- モンゴル支配はさらに100年続いたが、クリコヴォの勝利により「タタール人を恐れなく」なり「両社の関係を決定的に変えた」(廣岡、同)
- モンゴル王族間の争いが激しくなり、1480年、ロシアは朝貢を停止し独立へ

結論

- カトリック側からも攻撃を受けたロシアは、異教に寛容だったモンゴルを「選んで」支配下に入った。モンゴルの力が弱まると、ロシアが独立を試みる動きに正教会が「お墨付き」を与えた
- 宗教は統治に正統性を与えるものとして、ロシアでもモンゴル(自然崇拜)でも影響を及ぼし、また民族の求心力の基でもあった

問題意識

ロシアの「タタールのくびき」と言われるモンゴルによる統治の時代に、キリスト教はどのように振る舞い、どのような役割を果たしたのか

ヨーロッパの歴史とキリスト教

1. ユダヤ教から派生したキリスト教(一神教)
2. ローマ帝国初期はギリシア神話を背景に皇帝自身を神格化し、キリスト教を迫害
3. キリスト教がローマ帝国の国教に
4. 教会の東西分裂



ポスト・モンゴルの世界 (宗教の果たした役割)

1. 宗教改革がカトリックを世界へと向かわせた (布教活動のローバル化)
 - カトリックの布教は反発を招き、禁教へ
 - 国や地域社会での宗教・信仰の一般民衆への浸透、および人々の信仰の同一化、そして世俗主義へ (宗教の大衆化)
2. モンゴルは世界の構造化への道標を作った
 - 西アジアでの宗派对立
 - 宣教師らによる対外布教・国家による宗教統制と「国家宗教化」
 - 日本でのキリスト教禁令
 - 宗教、宗派のローカライゼーションと宗教マジョリティの出現→「統制」へ
3. ウェストファリア条約 (宗教戦争)
 - 政教分離と世俗主義の時代へ

結論

歴史における政治と宗教の協働

- 「タタールのくびき」前後の中世ロシアに於いて、キリスト教と国家は緊密に関係し合い権力の転換をもたらすきっかけを作った
- モンゴル帝国滅亡後、各国は宗教を「統制」した。各国の民族や地域に適合した宗教が確立すると思想的な安定がもたらされ、成熟した近代社会を確立する礎となった

まとめ

モンゴル帝国の衰退に関わる2つの視点

中国

宗教秘密結社の結束力による反乱を教訓に宗教を統制

- ❑ 「白蓮教」は正教から変化し邪教宗教秘密結社となった
- ❑ 元の政策が庶民の生活に直接的な影響を及ぼし不満が募り「紅巾の乱」へつながった
- ❑ 現代中国は宗教を社会主義に適応するように統制している

ロシア(ルーシ)

ロシア正教を軸とした統治に正統性を与えた

- ❑ ルーシは異教に寛容だったモンゴルを「選んで」の支配を受け入れ、一定のルールに従いつつ自律していった
- ❑ 「タタールのくびき」程の圧政は無かった
- ❑ 現代ロシアはロシア正教が政治のバランスを動かしていた

反乱

モンゴル

独立

モンゴルの寛容な思想と進化型組織

- ❑ シャーマニズムを信仰し、様々な地域の思想が反映され仏教思想をも取り込んで独自の世界観を持っていた
- ❑ 組織構造は、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく自動装置のようであり、進化型組織である「ティール組織」であった可能性がある

(5) RUSSIAN ORTHODOX CROSS (17) MUSLIM (Crescent and Star) (18) HINDU



フィールドワーク

フィールドワーク実績

ロシア(ルーシ)

- ❑ **栗生沢 猛夫** (くりうざわ たけお)
(著書『タタールのくびき』など。北海道大学名誉教授)
- ❑ **宮野 裕** (みやの ゆたか)
(著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など。岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授)

中国

- ❑ **山田 賢** (やまだ まさる)
(著書『移住民の秩序』『中国の秘密結社』等。千葉大学副学長)
- ❑ **菊池 秀明** (きくち ひであき)
(著書『広西移民社会と太平天国』『ラストエンペラーと近代中国』など。国際基督教大学アジア文化研究所所長)

独立

モンゴル

反乱

- ❑ **赤坂 恒明** (あかさか つねあき)
(著書『ジュチ裔諸政権史の研究』ラシード=アッディーン『集史』翻訳など。内蒙古大学蒙古学学院蒙古歴史学系の特聘副研究員)
- ❑ **川口 琢司** (かわぐち たくじ)
(著書『ティムール帝国支配層の研究』『ティムール帝国』など。藤女子大学文学部講師)

フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

宮野 裕 (みやの ゆたか) 教授

- 岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授
- 著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など



出典：宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』（NHK出版、2023年6月）

2023/07/29 「モンゴルとロシア（ルーシ）」



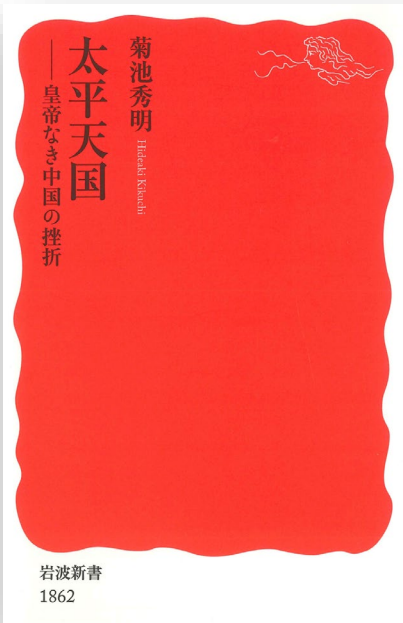
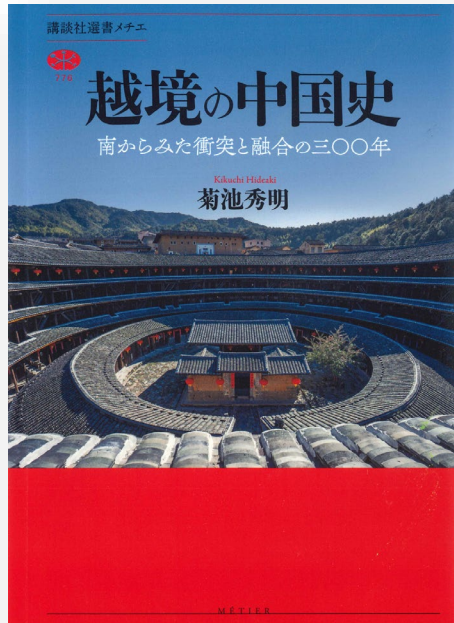
九段下 寺島文庫

フィールドワーク(2) : 台湾の宗教と政権の関係

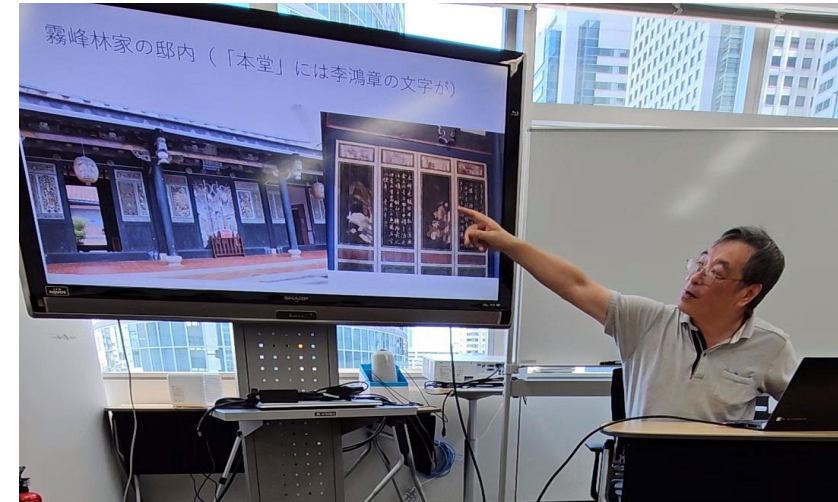
中国

菊池 秀明 (きくち ひであき) 教授

- ・ 国際基督教大学アジア文化研究所所長
- ・ 著書『越境の中国史—南からみた衝突と融合の三〇〇年』
『太平天国—皇帝なき中国の挫折』など



2023/08/12 「台湾の民間信仰と公権力
—2023年7月の調査から—」



アジアダイナミズム班 活動記録 (1)

| 回 | 日付 | 議題 | 発表者 | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク | 備考 |
|----|-----------|--|--------|--|--|
| 1 | 2023/4/15 | <ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 今年度テーマ方向性 | | | <ul style="list-style-type: none"> 春学期スケジュール確定 (参考文献)中国の秘密結社 |
| 2 | 2023/4/22 | <ul style="list-style-type: none"> 中国の宗教の位置づけ 参考資料を読んだ問題意識発表(1) | 高、日高、杉 | 「中国の秘密結社」 | <ul style="list-style-type: none"> メンバー確定 連絡用Classroom作成 |
| 3 | 2023/5/13 | <ul style="list-style-type: none"> 仮題『モンゴル帝国と宗教・秘密結社』 問題意識発表(2) | 村上、須貝 | 「中国の秘密結社」 | (参考資料) 論文起案例 |
| 4 | 2023/5/20 | <ul style="list-style-type: none"> ゼミ長・副ゼミ長確定 問題意識発表(3) | 高、福満 | 「中国の秘密結社」 | ・共同作業用Google Drive設定 |
| 5 | 2023/5/27 | <ul style="list-style-type: none"> 問題意識発表(4) 研究計画発表へ向けたスケジュールとアクションプラン | 日高、小柳 | 「中国の秘密結社」ほか | 寺島学長より、ロシアとモンゴルの関係について指摘 |
| 6 | 2023/6/3 | 新テーマ：ロシアとモンゴルについて議論 | - | 「中国の秘密結社」 「Empire's Twilight」 など | |
| 7 | 2023/6/10 | 中間発表に向けて発表・議論(ロシア) | 杉 | 「タタールのくびき」 「イースタニゼーション」 など | |
| 8 | 2023/6/17 | 研究計画発表の資料作成 | - | | |
| 9 | 2023/6/24 | 研究計画発表 | 全員 | | |
| 10 | 2023/7/1 | 中間発表に向けて発表・議論(中国) | 高 | 現代中国の秘密結社、中国の秘密結社の3パターン | |
| 11 | 2023/7/8 | 中間発表に向けて発表・議論(中国) | 日高 | 紅巾の乱と白蓮教 | |
| 12 | 2023/7/15 | 中間発表に向けて発表・議論(中国) | 中西 | 「欧米社会の集団妄想とカルト症候群」 | |

アジアダイナミズム班 活動記録 (2)

| 回 | 日付 | 議題 | 発表者 | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク | 備考 |
|----|---------------|----------------------|------------|-----------------------------|-------------|
| 13 | 2023/7/22 | 中間発表に向けて発表・議論(ロシア) | 杉 | 「『ロシア』はいかにして生まれたかータタールのくびき」 | |
| 14 | 2023/7/29 | フィールドワーク (宮野裕先生) | - | モンゴル帝国とロシアの関係 | |
| 15 | 2023/8/12 | フィールドワーク (菊池秀明先生) | - | 台湾と中国の宗教 | @大学院品川キャンパス |
| 16 | 2023/8/15 | 合宿発表資料準備 | 全員 | | オンライン |
| 17 | 2023/8/18 | 合宿発表資料準備 | 全員 | | オンライン |
| 18 | 2023/8/22 | 合宿発表資料準備 | 発表担当者 | | オンライン |
| 19 | 2023/08/23-24 | 合宿・中間発表 | 発表担当者 | | @箱根水明荘 |
| | 秋学期 | | | | |
| 17 | 9/30 | 秋学期参加者紹介、これまでの研究内容共有 | | | |
| 18 | 10/7 | 各自テーマに基づき発表 | 小柳 | | |
| 19 | 10/14 | 各自テーマに基づき発表 | 高橋、佐々木、二本柳 | | |
| 20 | 10/28 | 各自テーマに基づき発表 | 高 | | |
| 21 | 11/4 | 各自テーマに基づき発表 | 斉藤、日高、野中 | | |
| 22 | 11/11 | 各自テーマに基づき発表 | 村上 | | |
| 23 | 11/18 | 各自テーマに基づき発表 | 高橋、杉 | | |
| 24 | 11/25 | 各自テーマに基づき発表 | 中西、佐々木 | | |

アジアダイナミズム班 活動記録 (3)

| 回 | 日付 | 議題 | 発表者 | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク | 備考 |
|----|-------|------------------------|-----|---------------------|----|
| 25 | 12/2 | 各自テーマに基づき発表、最終発表に向けて議論 | | | |
| 26 | 12/9 | 各自テーマに基づき発表、最終発表資料準備 | | | |
| 27 | 12/16 | AL祭 | | | |
| 28 | 12/23 | 最終発表・論文提出 | | | |

参考文献・論文 (1)

参考文献・論文: 計141件

| | | |
|----|---|---|
| 1 | . | 山田 賢 『中国の秘密結社』 (講談社、 1998) |
| 2 | . | 東郷孝仁 『紅巾の乱研究の動向と課題』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』 第1号、1995年3月、 1995) |
| 3 | . | - 『【世界史】 宋と元の時代 モンゴル人の支配 5分でわかる! 寛大な統治の仕組み』 (TryIt 高校世界史B、) |
| 4 | . | Bickers, Robert, and Tiedemann, R.G. 『The Boxers, China, and the World』 (Rowman & Littlefield Publishers、 39275) |
| 5 | . | Own, David, and Heidhues, Mary F. Somers 『Secret Societies Reconsidered: Perspectives on the Social History of Early Modern South China and Southeast Asia』 (Routledge; 1st edition、 34334) |
| 6 | . | Heckethorn, Charles William 『"The Secret Societies of All Ages and Countries: Volume One" (1897)』 (Independently published、 43432) |
| 7 | . | Studysmarter 『Decline of Mongol Empire』 (https://www.studysmarter.co.uk/ 、) |
| 8 | . | - 『The Decline and Fragmentation of the Mongol Empire, 1256-99』 (https://www.massolit.io/ 、) |
| 9 | . | Jackson, Peter 『From Genghis Khan to Tamerlane: The Reawakening of Mongol Asia』 (Yale University Press、 2024) |
| 10 | . | - 『The Yuan dynasty in China (1279–1368) - Decline of Mongol power in China』 (https://www.britannica.com/ 、) |
| 11 | . | Morgan, David 『"The Decline and Fall of the Mongol Empire"』 (Cambridge University Press、 40087) |
| 12 | . | Bennett, H, Ryan 『THE RISE AND FALL OF THE MONGOL EMPIRE: THE FALL DUE TO INTERNAL STRUGEL AND DISEASE』 (https://www.academia.edu/ 、 42844) |
| 13 | . | 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後』 (講談社、 2016) |
| 14 | . | 寺島実郎 『人間と宗教』 (岩波書店、 2021) |
| 15 | . | 東郷孝仁 『杜遵道と紅巾の乱——元末「紅巾」登場の背景』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』 第3号、1997年3月、 1997) |
| 16 | . | 東郷孝仁 『徐壽輝西系紅巾軍の内部構造——元末天完政権の体質と限界』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』 第7号、2001年6月、 2001) |
| 17 | . | 野口鉄郎 『明代白蓮教史の研究』 (雄山閣、 1986) |
| 18 | . | 綾部恒雄 (監修), 野口鉄郎 (編集) 『結社が描く中国近現代 (結社の世界史 2)』 (山川出版社、 2005) |
| 19 | . | 綾部恒雄 (監修), 福田アジオ (編集) 『結衆・結社の日本史 (結社の世界史 1)』 (山川出版社、 2006) |
| 20 | . | 綾部恒雄 (監修), 福井憲彦 (編集) 『アソシエイションで読み解くフランス史 (結社の世界史 3)』 (山川出版社、 2005) |
| 21 | . | 綾部恒雄 (監修), 川北稔 (編集) 『結社のイギリス史 (結社の世界史 4)』 (山川出版社、 2005) |

参考文献・論文 (2)

参考文献・論文: 計141件

| | |
|----|--|
| 22 | 綾部 恒雄 『クラブが作った国 アメリカ (結社の世界史 5)』 (山川出版社、 2005) |
| 23 | 壇上寛 『明の太祖 朱元璋』 (筑摩書房、 2020) |
| 24 | 壇上寛 『永楽帝 一華夷秩序の陥穽』 (講談社、 2012) |
| 25 | 『秘密結社 世界を動かし続ける沈黙の集団』 (日経ナショナルジオグラフィック社、 2018) |
| 26 | 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡〈上〉』 (講談社、 35205) |
| 27 | 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡〈下〉』 (講談社、 35236) |
| 28 | Wikipedia 『モンゴルのルーシ侵攻』 (Wikipedia、) |
| 29 | Wikipedia 『タタールのくびき』 (Wikipedia、) |
| 30 | 栗生沢猛夫 『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』 (東京大学出版会、 2007) |
| 31 | Wikipedia 『露蒙関係』 (Wikipedia、) |
| 32 | MANAEV, GEORGY 『「タタールのくびき」 モンゴル帝国のロシア侵攻・支配の実像』 (Russia Beyond、 43999) |
| 33 | MANAEV, GEORGY 『The Mongol invasion was the reason Russia formed』 (Russia Beyond、 43999) |
| 34 | Halperin, Charles J 『ロシアとモンゴル—中世ロシアへのモンゴルの衝撃』 (図書新聞、 39508) |
| 35 | Halperin, Charles J 『Russia and the Golden Horde: The Mongol Impact on Medieval Russian History』 (Indiana University Press、 1987) |
| 36 | Halperin, Charles J 『George Vernadsky, Eurasianism, the Mongols, and Russia』 (Cambridge University Press、 42762) |
| 37 | Perrie, Maureen 『The Cambridge History of Russia: Volume 1: From Early Rus' to 1689』 (Cambridge University Press、 2006) |
| 38 | Curtin, Jeremiah 『The Mongols in Russia』 (Boston, Little Brown、 1908) |
| 39 | Leo de Hartog 『Russia and the Mongol Yoke: The History of the Russian Principalities and the Golden Horde, 1221-1502』 (British Academic Press、 1996) |
| 40 | Jackson, Peter 『The Mongols and the Islamic World: From Conquest to Conversion』 (Yale University Press、 2017) |
| 41 | 栗生沢猛夫 『中世ロシアの法文化とモンゴル支配』 (「スラブ・ユーラシア学の構築」 研究報告集, no. 24 (2008年): 1-24、 2008) |
| 42 | 新藤義彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977年): 129-50.、 1977) |
| 43 | 宮野 裕 『世界史のリテラシー 「ロシア」は、いかにして生まれたか タタールのくびき』 (NHK出版、 45056) |

参考文献・論文 (3)

参考文献・論文: 計141件

| | |
|------|---|
| 44 . | Charles J. HALPERIN, Russia and the Golden Horde : the Mongol impact on medieval Russian history. Indiana University Press, 1985. (中村正己訳『ロシアとモンゴル——中世ロシアへのモンゴルの衝撃』図書新聞、2008年3月) |
| 45 . | The Mongols in Russia_03curtgoog |
| 46 . | アレクサンドル=ボブロフ・越野剛・宮野裕・毛利公美・佐光伸一「東方の知られざる人々の物語」(『スラヴ研究』第52号、2005年) 52-010 |
| 47 . | 伊丹聡一郎「書評: J. フェネル著、宮野裕訳『ロシア中世教会史』」(『駿台史學』第167号、2019年9月) sundaishigaku_167_166 |
| 48 . | 宇山智彦「ロシアと中央アジア」(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第17巻「近代アジアの動態——一九世紀」岩波書店、2022年7月、焦点) |
| 49 . | 宮野裕「新出の異端に関する物語」覚書——15世紀末のヨシフ・ヴォロツキーと府主教ゾシマとの論争の考察の前提として」(『西洋史論集』第9号、2006年3月) 9_62-91 |
| 50 . | 宮野裕「14-15世紀モスクワの国家と教会」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第57号、2018年2月) 14-15世紀モスクワの国家と教会 |
| 51 . | 宮野裕「14世紀のストリゴリーニキ「異端」と正統教会」(『スラヴ研究』第46号、1999年) 46-003 |
| 52 . | 宮野裕「15世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作業——フェラーラ・フィレンシエ公会議観の変化を中心に」(『西洋史論集』第11号、2008年7月) 11_60-90 |
| 53 . | 宮野裕「15世紀末のロシアにおける修道制批判とヨシフ・ヴォロツキーによるその処理方法」(『西洋史論集』第8号、2005年3月) 8_1-24 |
| 54 . | 宮野裕「On the so-called 'Pravosudie Mitropolich'e」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第54号、2015年2月) KJ00009710019 |
| 55 . | 宮野裕「イヴァン三世の一四九七年法典における多文化性——「刑事条項」を中心に」(『ロシア史研究』第80号、2007年5月) 80_KJ00004604561 |
| 56 . | 宮野裕「イヴァン三世時代のモスクワ国家における宮廷問題と「異端者」」(『ロシア史研究』第75号、2004年11月) 75_KJ00002625875 |
| 57 . | 宮野裕「キエフ府主教ヨアン2世の『カノン回答集』——中世ルーシへの導入のあり方を中心に」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第60号、2021年2月) |
| 58 . | 宮野裕「ストリゴリーニキの「書物」をめぐる最近の論争——『偽の教師についての講和』を中心に」(『西洋史論集』第1号、1998年7月) 1_1-14 |
| 59 . | 宮野裕「ヤロスラフ賢公の教会規定——解説と試訳・訳注」(『北方人文研究』第2号、2009年3月) 05_p81-100 |
| 60 . | 宮野裕「ヨシフ・ヴォロツキーの「ノヴゴロドの異端者」像——中世ロシアの異端論駁書『啓蒙者』簡素編集版を中心に」(『西洋史学』第212号、2003年) 212_44 |
| 61 . | 宮野裕「ロシア・ビザンツ」(『史学雑誌』第114巻第5号、2005年5月、「2004年の歴史学界 回顧と展望」「ヨーロッパ」「中世」)114_KJ00003653717 |
| 62 . | 宮野裕「ロシア正教会の異端対策の展開——一五世紀のストリゴリーニキ異端への対策を中心に」(『ロシア史研究』第67号、2000年10月) 67_KJ00001526626 |
| 63 . | 宮野裕「一四世紀後半から一五世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力」(『ロシア史研究』第98号、2016年7月) 98_3 |
| 64 . | 宮野裕「十五世紀末のロシア正教会における正統と異端——「ノヴゴロドの異端者」を中心に」(『史学雑誌』第113巻第4号、2004年4月) 113_KJ00003653315 |
| 65 . | 宮野裕「書評: パシコヴァ『一六世紀前半のロシア国家における地方支配——代官と郷司』」(『スラヴ研究』第50号、2003年) 50-014 |
| 66 . | 宮野裕「新刊紹介: V・L・ヤーニン著、松木栄三・三浦清美訳『白樺の手紙を送りました——ロシア中世都市の歴史と日常生活』山川出版社、2001年5月」(『史学雑誌』第113巻第12号、2004年12月) 113_KJ00003653253 |
| 67 . | 宮野裕「新刊紹介: シネロボフ『16-17世紀の都市執行役とグバー長老の構成』2014年」(『ロシア史研究』第96号、2015年6月) 96_KJ00010005068 |

参考文献・論文 (4)

参考文献・論文: 計141件

| | |
|------|---|
| 68 . | 宮野裕「新刊紹介：セバスティアノバ『古代ノヴゴロド——12世紀から15世紀前半のノヴゴロドと公の関係』2011年」（『ロシア史研究』第94号、2014年5月）94_KJ00009355267 |
| 69 . | 宮野裕「中世ノヴゴロド国の安全保障体制——ヤーニンの近著『ノヴゴロドとリトアニア』に寄せて」（『西洋史論集』第4号、2001年3月）4_30--42 |
| 70 . | 宮野裕「中世ロシアのウラジーミル聖公の教会規定——写本系統樹の検討及び試訳」（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第51号、2012年2月）KJ00007766879 |
| 71 . | 宮野裕「中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」」01（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第61号、2022年2月） |
| 72 . | 宮野裕「中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」」02（『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第62号、2023年2月） |
| 73 . | 宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』（NHK出版、2023年6月） |
| 74 . | 栗生沢猛夫・宮野裕「イヴァン四世雷帝の『一五五〇年法典』訳と訳注」01（『北海道大学文学研究科紀要』第116号、2005年7月）116_PR115-185 |
| 75 . | 栗生沢猛夫・土肥恒之「「動乱」とロマノフ朝の始まり」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第4章） |
| 76 . | 栗生沢猛夫「モスクワ国家の時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第3章） |
| 77 . | 栗生沢猛夫「モンゴル支配の開始」（『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年1月。第1章） |
| 78 . | 栗生沢猛夫「ロシア史におけるモンゴル支配の意味」（『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年1月。第7章） |
| 79 . | 栗生沢猛夫「諸公国分立の時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第2章） |
| 80 . | 栗生沢猛夫『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー——「動乱」時代のロシア』（山川出版社、1997年6月） |
| 81 . | 細川滋「キエフ・ルーシの時代」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、第1章） |
| 82 . | 三浦清美「書評：ジョン・フェネル著、宮野裕訳『ロシア中世教会史』」（『ロシア語ロシア文学研究』第50号、2018年10月）50_163 |
| 83 . | 松木栄三「ロシア史とタタール問題」（『ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史』風行社、2018年6月。第4章） |
| 84 . | 松木栄三『ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史』（風行社、2018年6月） |
| 85 . | 川口琢司「キプチャク草原とロシア」（樺山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月） |
| 86 . | 中井和夫『ウクライナ・ベラルーシ史』（初出は伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年12月。新版、2023年5月） |
| 87 . | 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」11「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1230～1250年）」（『富山大学人文学部紀要』第71号、2019年8月）71_01-13_Page177to270_nakazawa |
| 88 . | 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」12「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1251～1264年）」（『富山大学人文学部紀要』第72号、2020年2月）72_01-08_Page115to200_nakazawa |
| 89 . | 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」13「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1265～1287年）」（『富山大学人文学部紀要』第73号、2020年8月）73_01-14_Page229to290_nakazawa |
| 90 . | 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈」14「『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1287～1292年）」（『富山大学人文学部紀要』第74号、2021年2月）74_01-12_Page173to217 |

参考文献・論文 (5)

参考文献・論文: 計141件

| | |
|-------|--|
| 91 . | 中沢敦夫「書評：宮野裕『「ノヴゴロドの異端者」事件の研究——ロシア統一国家の形成と「正統と異端」の相克』風行社、2009年8月）」（『ロシア史研究』第87号、2010年12月）87_KJ00008426925 |
| 92 . | 土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』（『興亡の世界史』第14巻、講談社、2007年3月。講談社学術文庫2386、講談社、2016年9月） |
| 93 . | 野田仁『露清帝国とカザフ=ハン国』（東京大学出版会、2011年3月） |
| 94 . | 和田春樹「「ロシア」の成り立ち」（和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年8月。一部改稿、2023年4月、序章） |
| 95 . | Empire'sTwilight_Robinson_Chap4 |
| 96 . | 黄育榎原著、澤田瑞穂校注『校注破邪詳辯——中国民間宗教結社研究資料』（道教刊行会、1972年3月） |
| 97 . | 菊池秀明『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』（講談社選書メチエ776、講談社、2022年12月） |
| 98 . | 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』史料編（風響社、1998年2月） |
| 99 . | 菊池秀明『太平天国——皇帝なき中国の挫折』（岩波新書新赤版1862、岩波書店、2020年12月） |
| 100 . | 結社が描く中国近現代 |
| 101 . | 三石善吉『中国の千年王国』（東京大学出版会、1991年4月） |
| 102 . | 三谷孝『現代中国秘密結社研究』（汲古書院、2013年12月） |
| 103 . | 山崎岳「アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、焦点） |
| 104 . | 山田賢『移住民の秩序——清代四川地域社会史研究』（名古屋大学出版会、1995年1月） |
| 105 . | 山田賢『中国の秘密結社』 |
| 106 . | 四日市康博「ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」岩波書店、2023年4月、展望） |
| 107 . | 守川知子「宗派化する世界——宗教・国家・民衆」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、問題群） |
| 108 . | 孫江『近代中国の革命と秘密結社——中国革命の社会史的研究 一八九五～一九五五』（汲古叢書72、汲古書院、2007年3月） |
| 109 . | 孫江『近代中国の宗教・結社と権力』（汲古叢書103、汲古書院、2012年6月） |
| 110 . | 孫江『中国の「近代」を問う——歴史・記憶・アイデンティティ』（汲古選書70、汲古書院、2014年6月） |
| 111 . | 瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成』10『小説集』04（『皇明英烈伝』など、遊子館、2017年1月） |
| 112 . | 中砂明德『江南』02「学術の市場」 |
| 113 . | 塚田誠之『壮族文化史研究——明代以降を中心として』（第一書房、2000年9月） |
| 114 . | 浜本隆志編著『欧米社会の集団妄想とカルト症候群——少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人種主義の生成と連鎖』（明石書店、2015年9月） |

参考文献・論文 (6)

参考文献・論文: 計141件

| | |
|-----|---|
| 115 | 鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究——中国・東南アジアにおける』（東京大学出版会、1982年2月） |
| 116 | Lucio de SOUSA・岡美穂子「奴隷たちの世界史」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、問題群） |
| 117 | 久保一之・木村暁・井上治「ポスト・モンゴル期」（小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社、2018年4月。第5章） |
| 118 | 久保一之「ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き」（榊山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月） |
| 119 | 近藤信彰「サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀」岩波書店、2023年1月、問題群） |
| 120 | 荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第10巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」（岩波書店、2023年4月） |
| 121 | 坂本勉「未完のトルキスタン国家」（『トルコ民族の世界史』講談社現代新書1327、講談社、1996年10月。改題し、慶應義塾大学出版会、2006年5月。新版、2022年5月、第4章） |
| 122 | 山下範久「一四～一九世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、問題群） |
| 123 | 志茂碩敏「モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討」（榊山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月） |
| 124 | 寺島実郎総監修『モンゴル帝国とユーラシア史』 |
| 125 | 小笠原弘幸「オスマン王権とその正統性——血統、聖性、カリフ」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀」岩波書店、2023年1月、焦点） |
| 126 | 森川哲雄「ポスト・モンゴル時代のモンゴル——清朝への架け橋」（榊山紘一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月） |
| 127 | 真下裕之「ムガル帝国における国家・法・地域社会」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀」岩波書店、2023年1月、問題群） |
| 128 | 杉山正明「「婿どの」たちのユーラシア」（『興亡の世界史』第9巻「モンゴル帝国と長いその後」講談社、2008年2月。講談社学術文庫2352、2016年4月。第7章） |
| 129 | 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年2月）一部ナシ |
| 130 | 川口琢司「ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」岩波書店、2023年4月、焦点） |
| 131 | 川口琢司『ティムール帝国』（講談社選書メチエ570、講談社、2014年3月） |
| 132 | 早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究——現状と展望』（明石書店、2011年6月） |
| 133 | 島田竜登「構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻「構造化される世界——一四～一九世紀」岩波書店、2022年11月、展望） |
| 134 | 林佳世子「西アジア・南アジアの近世帝国」（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻「西アジア・南アジアの帝国——一六～一八世紀」岩波書店、2023年1月、展望） |

参考文献・論文 (7)

参考文献・論文: 計141件

| |
|---|
| 135 . 佐伯富『中国塩政史の研究』(法律文化社 1987年) |
| 136 . 宮澤知之「権鈔錢に見る元代民間の通貨ルール」(2005年) |
| 137 . 高橋弘臣「元朝通貨政策成立過程の研究」(1994年) |
| 138 . 矢崎正見「チベットに対する元朝の宗教政策」(1970年) |
| 139 . 野口鐵郎「元末のいわゆる東系紅巾軍諸勢力について—郭子興と芝麻李—」(1974年) |
| 140 . 東郷孝仁「紅巾の乱研究の動向と課題」(1995年) |
| 141 . 清水俊毅「経済と宗教」(2014年) |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |
| . |

ご清聴ありがとうございました



アジアダイナミズム班

学部生：野中, 高, 中西, 村上, 日高

大学院生：杉, 須貝, 小柳, 高橋, 二本柳, 佐々木, 斎藤

指導教員：金美徳, 水盛涼一